

## 「破れからの出発」

詩篇 第51篇 1節～19節  
コリント人への第一の手紙 第9章 19節～23節

説教 本庄 侑子 伝道師

今朝は、伝道者パウロの言葉をお聞きしています。パウロは人を「得る」ことに集中していました。「得る」は、他の箇所や訳では「救いに導く」、「信仰に導く」と言い換えられます。つまりパウロは《伝道》に集中していました。

パウロはまた、こんなことも言っています。「福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。」(コリント人への第一の手紙 第9章23節)この「共にあずかる」は、元の言葉では《コイノニア》、日本語では《交わり》と訳されます。《交わり》と聞くと、仲睦まじい関係と思いがちです。しかし、聖書が語る《交わり》は壮絶です。

「キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したい。」(ピリピ人への手紙 第3章10～11節)この「あずかる」が《コイノニア》です。パウロが語る《交わり》は、何よりもまずキリストとの交わり、それもキリストの苦難との交わりをさしました。さらには、「キリストの死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達する」こと、《聖化》をさしました。

今の私が死に、キリストの中に、その苦難に、その死と復活に、私自身が埋め込まれていく聖化なしには、キリストとの交わりを得ていると言えない。パウロが語るのはそういうことです。さらに今日の聖書箇所によると、それは人を「得る」こと、《伝道》抜きにも語れないようです。ただひたすらに伝道に集中させられる中で、キリストとの交わりが与えられ、聖化されていく。それがキリスト者の生き様なのです。

しかしまた、私たちは知っています。キリスト者とされてからこそ、私たちの限界、破れが、かえってあらわになっていくことを。パウロ自身も苦しみました。自身の罪にもだえ苦しむリアルな嘆きが聖書のあちこちに残されています。

今朝、共にお読みしている詩篇51篇は、自分の罪によって自分自身が完全に崩壊し、全てを失った中で生まれました。祈り手は、自身の最も深い所にのさばる罪をはっきり見えています。(3節)パウロの嘆きと響き合うような「わたしの罪」に苦しむ悲痛な叫びです。しかし、祈り手はそこで立ち止まりませんでした。(7～9節)祈

り手は見たのです。罪に破れ果てた私のもとにまでくんだり、赦し、清め、喜びと楽しみを満たしてくださる方のお姿を。

祈り手に、全く新しい《悔い改め》の祈りが生まれました。(10～12節)人が本当の意味で悔い改めるのは、罪に沈む時ではありません。罪に破れ果てた私を、身をよじらせるようにしてなお愛し、なお赦す、神の壮絶なお姿、十字架の愛に触れられた時です。この神以外に、私を立たせ、生かすもの、私を新しくすることができるものはない。そう思い知って、ただひたすらに神に依り頼む者とされる時です。

パウロの言葉の背後に、ある姿が浮かんできます。「仕えられるためにではなく、仕えるために来た。多くの人をあがないとして、自分の命を与えるために来た」(マルコによる福音書 第10章45節)と語り、そのように生きた、主イエス・キリストのお姿です。「ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。」(コリント人への第一の手紙 第9章20節)これは、私たちが人に共感し、共に生きる、という次元の話ではないのです。己の罪の破れの果てで、神の赦しの愛に触れた者の言葉。人を救うために人となり、十字架についてくださった神の伝道の仕方に、この私が埋め込まれてしまった。そんな壮絶な交わりを証する言葉です。

私たちにも同じ事が起きています。洗礼は、イエス・キリストとこの私が一つの特別な関係に入ったしるし。キリストの伝道へと召され、キリストの苦難へと引き入れられ、自分に死に、キリストの姿に埋め込まれていく、そのスタートをきったしるしです。礼拝は、そんなキリストとの《交わり》の中に置かれているしるし。罪に死に、キリストの霊による創造としか言い得ない言葉と行いとを、この体に新しく与えられ続けて生きているしるしです。

聖霊は今も生きて働き、私たちを内側から握りしめ、キリストの似姿へ変えようとうめいています。キリストとの壮絶な交わりの中で、主の赦しの愛にくずおれ、私が死んで、キリストが生きる。破れから出発し、完成へと向かう聖霊の御業が私たちの内で進む中で、人を「得る」主の福音は前進していくのです。

(記 本庄侑子)